

- 185 覆巢憎鷄卵 巢を覆して鷄卵を憎み
 186 搜穴叱蜚蜾 穴を搜して蜚蜾を叱す
 187 法酷金科結 法 酷して 金科 結び
 188 功休石柱鏹 功 休して 石柱 鏹る
 189 悔忠成甲冑 忠の 甲冑と成らんことを悔い
 190 悲罰痛戈鋌 罰の 戈鋌よりも痛きことを悲しむ

【二十段】

この結末の十句では、『晉書』の「羊祜傳」にある故事を踏まえて、京に戻ることもかなわず自分自身が太宰の地で命を落とすであろう予感にどこにも怒りを吐露することも出来ない無念さと、現状の非情さにおののきつつ、これも己れの宿命だと諦念する心情が流れる。これは、先に指摘したように、【一段】と対峙させればより鮮明になる。ここにも道真の見事な作品構成への配慮がなされていることを再確認できる。

そして、この句の一九九句、二〇〇句こそがこの作品の主題となっている。つまり、白居易・元稹等の唱和詩の内容を一方で対比させれば、そうした心を許し合える友を持ちえぬ、道真の「天涯孤独の底知れぬ心の闇」の叫びである。

- 191 瓊瓊黄茅屋 瓊瓊たり 黄茅の屋
 192 荒荒碧海壖 荒荒たり 碧海の壖